

平成 20 年 2 月 12 日

各 位

西日本国際財団
西日本シティ銀行

平成 19 年度

「第 9 回西日本国際財団アジア貢献賞」

「第 3 回西日本国際財団アジア Kids 大賞」

受賞者決定のお知らせ

財団法人 西日本国際財団（理事長 新藤 恒男）ならびに西日本シティ銀行（頭取 久保田 勇夫）は、平成 12 年に財団設立 15 周年を記念して「西日本国際財団アジア貢献賞」を創設し、また、平成 17 年に財団設立 20 周年を記念して「西日本国際財団アジア Kids 大賞」を創設いたしました。以来、毎年、九州・山口地域においてアジアとの国際交流に貢献している団体・個人等を表彰いたしております。（各賞の概要は、別紙 1 をご参照ください。）

それぞれの平成 19 年度受賞者が下記の通り決定いたしましたのでお知らせいたします。

記

1. 受賞者（敬称略）

（1）「第 9 回西日本国際財団アジア貢献賞」

受賞者	活動地域	分野	活動内容
熊本国際化センター（KIC） 理事長 谷川政敏	カンボジア 熊本	人物交流 経済発展支援	豊富な知識、人脈を生かし、支援活動を通じて、カンボジアとの友好関係樹立に取り組んでいる。
インド国際子ども村 「ハッピーバリー」 代表者 大神のりえ	インド 宮崎	人物交流 人材育成	1992 年国際子ども村をインドに開設以来、子ども達の平和キャンプを実施。活動は国際交流から教育問題の解決へと発展している。
ネパールの教育を支援する 熊本ナマステの会 会長 大瀬敏克	ネパール 熊本	人物交流 人材育成	県内小中学校生徒による書損はがき回収運動により、毎年ネパールへ学校建設資金を送る。学校建築実績は 15 校。

（2）「第 3 回西日本国際財団アジア Kids 大賞」

受賞団体	活動地域	活動内容
清武館道場 代表者 小野勇治	韓国 大分(豊後大野市)	私財を投じて建設した清武館道場と韓国・正心館道場との剣道を通じての交流を 19 年間に渡って行っている。本活動をきっかけに行政間交流へと発展。
福岡市立西新小学校 校長 久門隆	韓国 福岡	福岡市立の小中学校でいち早く韓国・初等学校と姉妹締結を行い 15 年間欠かすことなく国際交流を行っている。PTA、地域の協力へと拡大。

受賞団体の詳細は別紙 2・3 をご参照ください。

2. 表彰の内容

西日本国際財団アジア貢献賞 : 賞状と、副賞として1百万円および記念品を贈呈。

西日本国際財団アジア Kids 大賞 : 賞状と、副賞として30万円および記念品を贈呈。

3. 表彰式

平成20年3月7日(金)14時よりホテルニューオータニ博多にて開催。

4. 候補者推薦状況

九州・山口地域の各県・政令都市の国際部門、国際交流協会等から平成19年9月末までに推薦を受けた候補の状況は次の通りです。

(1) 西日本国際財団アジア貢献賞

県別

福岡	佐賀	熊本	宮崎	長崎	大分	鹿児島	沖縄	山口	合計
4	1	3	2	1		1	1	2	15

分野別

人物交流・人材育成	スポーツ・文化	医療・福祉・経済発展援助	合計
7	5	3	15

(2) 西日本国際財団アジア Kids 大賞

学校等団体別

小学校	中学校	その他活動団体	合計
5 (福岡・佐賀・鹿児島)	7 (福岡・佐賀・長崎・大分)	5 (福岡・大分・沖縄)	17

5. 選考経緯

平成19年7月～8月 各機関・団体に推薦を依頼

9月末 推薦締め切り

(アジア貢献賞15候補・アジア Kids 大賞17候補受付)

11月16日 選考委員会(委員長 長友 泰明)にて、それぞれの候補の中から6候補づつを選定。

平成20年1月21日 審査委員会(委員長 田中 健藏)にて、それぞれの6候補からアジア貢献賞受賞3団体、アジア Kids 大賞受賞2団体を決定。

以上

本件に関するお問い合わせ先 西日本国際財団 事務局 渡辺・友池 TEL092-476-2154
--

西日本国際財団アジア貢献賞の概要

西日本国際財団は、昭和 60 年 3 月、西日本シティ銀行（旧西日本銀行）の普銀転換、並びに創立 40 周年の記念事業として設立されました。

以来、今日まで国際交流を推進することにより、国際相互理解の促進、国際的人材の育成、及び地域との交流を目的として事業を続けて参りました。

平成 12 年 3 月で 15 周年を迎えるにあたり、九州・山口地域において、アジアの発展及びアジアとの国際交流に貢献している団体又は個人を表彰し、国際交流の輪を拡げようという趣旨で「西日本国際財団アジア貢献賞」を設けました。

1. 対象

原則として九州・山口地域に居住し、アジアの発展及びアジアとの国際交流に貢献している団体又は個人を対象とします。

2. 基準

- (1) 人物交流・人材育成
- (2) スポーツ・文化
- (3) 医療・福祉・経済発展援助

の範囲の中から 3 団体（個人）程度を表彰します。

但し、研究部門及び営利を目的とする団体（個人）を除きます。

3. 表彰内容

表彰基準に照らし、国際貢献の努力と成果において最も相応しい団体（個人）を選考委員会、審査委員会で選定し、賞状、顕彰金及び記念品を贈呈します。

西日本国際財団アジア Kids 大賞の概要

西日本国際財団創立 20 周年記念特別賞として平成 17 年に、「西日本国際財団アジア Kids 大賞」を創設しました。以来、国際交流事業を通じ、国際相互理解と国際友好親善の促進に貢献している小・中学校およびその周辺で活動している地域こども団体を表彰しております。

1. 対象

原則として九州・山口地域の小・中学校およびその周辺で活動している地域こども団体を対象とします。

2. 基準

上記 1. の対象者が行う、国際交流事業、国際相互理解と国際友好親善の促進に貢献し、なおかつ、継続性・相互性・自立性・教育性の要件を備えているもの。

3. 表彰内容

表彰基準に照らし、最も相応しい学校・団体を選考委員会、審査委員会で選定し、賞状、副賞賞金および記念品を贈呈します。

以上

第9回西日本国際財団アジア貢献賞 受賞者の活動内容

熊本国際化センター（K I C）

（活動分野：人物交流・経済発展支援）

（1978年設立 理事長：谷川政敏氏 活動地域：カンボジア・熊本県）

「世界に広がれ郷土くまもと」を合い言葉に、郷土の変革を求める細川県知事（1983年～）の日本一運動づくりを支える活動団体として、1978年設立時からの地域密着型の県民活動は、「国際交流最前線」として各方面に高い関心を集めて来ました。

その一歩踏み込んだ活動は、県民国際化相談窓口「ヘルプラインくまもと」の運営、県民国際化意識調査（市町村民3,700名対象）、国際理解教育や開発教育の外部講師など多岐にわたりました。

1989年、交流の場の少ないアジアの留学生からの要望で、活動座標軸をアジアとし、「アジア国際交流サロン」や「アジア県民講座」なども手掛けました。

カンボジアとの出会いは、和平後に、カンボジア運輸通信省幹部から再度復興協力の要請を受けていた郵政省やJ C B Lからの当センターへの協力要請、また、初の派遣日本人装具士が会員のご子息であった事や大阪万博に子供アプサラで来日した女性が会に参加した事などもあり、九州初のカンボジア支援団体として地雷廃絶活動を推進することになりました。学校や公民館などで積極的なカンボジア理解講座や地雷問題の学習会、地雷被災者への協力活動を展開しました。

その後も、J C B Lと連携し、現地カルメット病院内に地雷被害者支援の「カンボジアトラスト」作り、現地装具士育成、装具士来日研修（ODA予算）、ノーベル賞受賞者を招聘した平和学習授業（延べ7,000名）街頭募金や校内募金などを展開してきました。その活動のお礼にと王立伝統舞踊団（50名）が来熊、巡回公演し、友好を深め、福岡のアジアマンスにも毎年招待を受けました。

2005年からは活動の柱として、日本人旅行者への安全・安心の提供により、カンボジア大好き人間を増やす「旅行者満足度UP作戦」を観光省・観光産業と進めています。

その一つが飲料水の改善です。それまで日本人が同国を訪れても帰国時には細菌性下痢にかかり、リピーター化しなかったため、華僑系水会社への日本の専門企業技術者の派遣や地元の水製造会社の視察実施など各種の改善アドバイスを試み、今では年間36万本製造販売しています。

また、当センター企画のスタディツアー「朱印船の旅」には、九州内からの参加者を得て、孤児施設訪問支援や経済視察、大学や文化遺跡での文化交流などを重ねており、その結果、相手国政府にも歴史関係の共有認識が図られはじめました。アセアン交流年2003では「孤児舞踊団巡回公演」や、友好団体として在京の永青文庫の協力で「波奈之丸天井画」をプノンペン市に友好寄贈、在カンボジア日本人会の「ロアム盆踊り大会」に友情参加、大使館の要請で日本のODAで完成した「きずな橋」の渡り初めにも列席しました。

地元では、九州で学ぶ同国留学生の会も当センター内で産声を発しました。

日本留学経験者が起業した旅行社N C Tなどを支援協力し、就労者数の増加を図っています。同社には、日本人スタッフも派遣し、昨年は観光省大臣一行の招聘や、熊本からチャーター便を出し「歴史友好訪問団（同国政府受け入れ便）」での歴史事業を協働実施しました。

国内やタイ・ベトナム間を走るメコンバス会社とは、メコン河観光開発のための高速艇メコンエクスプレスが熊本県天草で作られたことが縁で、バスガイドの育成や安全走行90kmの厳守、車両清掃、車内サービス向上等のアドバイスなどに関わっています。昨年、同国初のバスガイド

第9回西日本国際財団アジア貢献賞 受賞者の活動内容

の「民間表彰」を実施しました。今年は、バスの燃費改善プロジェクトを進めています。

「ブノンベン経済特区」への日本企業誘致や環境開発、観光省との手着かすの温泉源を活用したリゾート観光開発や、エコツーリズムの推進、カンボジア版「MICHINOEKI」構想などに取り組んでゆきます。

今後は熊本県保険科学大学の学術研究と連携した、通年での専門性を活かしたカンボジア支援イベントやセミナーの開催を準備中です。

同国の人づくり・国造りに今後も尽力し、アジアの玄関口九州の地を繋いでゆきたいと思えます。

インド国際子ども村「ハッピーバリー」 (活動分野：人物交流・人材育成)
(1987年設立 代表者：大神のりえ氏 活動地域：インド・宮崎県延岡市)

戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない。

ユネスコ(国際連合教育科学文化機関)の憲章前文にこの言葉があります。インド国際子ども村「ハッピーバリー」は世界中の子どもたちの心に「平和の砦」を築こうと1987年に設立された民間国際交流団体です。今年が設立20周年になります。設立後、インドバザールやチャリティコンサートを通じて資金を集め、インド南部カルナータカ州に国際子ども村「ハッピーバリー」を設立しました。

1992年の開村後、子ども達をインドに派遣する「平和キャンプ」を開催しています。この事業には宮崎県北部の市町村から渡航費の補助をいただき、現在迄にスタッフを含め400名以上が参加しており、宮崎県内の国際交流の大きな事業となっています。

また、インド・スリランカからの招聘事業、インド西部地震の被災地への支援、職業訓練のための資金援助など、子どもを中心にした活動を手がけています。特に最近では平和キャンプの参加について登校不適合の子ども達の保護者からの問い合わせも多く、私たちの活動は国際交流から教育問題の解消へと発展しています。

2001年の平和キャンプでは子ども達がインド西部地震の被災地を訪れ、被災した子ども達との交流をおこないました。2005年の平和キャンプでは、スリランカを訪問し、津波の被害を受けた学校での子どもたちとの交流をおこないました。2007年には日印交流年記念事業に参加し、活動の様子がインド国営放送にて放送されました。

このように私たちは地域の住民と世界をつなぎ、一人ひとりが命を輝かせる平和な世界の実現をめざして活動しています。

第9回西日本国際財団アジア貢献賞 受賞者の活動内容

ネパールの教育を支援する熊本ナマステの会 (活動分野：人物交流・人材育成)
(1994年設立 会長：大瀬敏克氏 活動地域：ネパール・熊本県人吉市)

1. はじめに

「ネパールの教育を支援する熊本ナマステの会」(会員 230名)は、平成6年10月に発足。会発足2年前の活動(人吉一中)を合わせると、17年の活動となり、活動の目的は、ネパールの子どもの教育支援と、日本の子ども達が活動を通して「ものを大切に作る心」と「国際協力への理解」を育むことです。

平成20年3月末には、15校目のガネシュ小学校が完成する予定ですが、その内訳は小学校が9校、中学校が4校、高等学校が2校の15校となり、これらの学校で学んでいる児童生徒は約5,300人、卒業生を含めると約7,000人になります。また、今年1月からは、16校目の建設のため「書き損じはがき」3万枚を目標に回収活動を展開しています。

2. ネパールとの関わりのきっかけ(人吉一中「ネパールに学校を贈ろう」の活動から)

平成4年度、人吉市立第一中学校の校舎改築が総額23億円で開始されました。当時のPTA会長(現在人吉市長)から「勉強をしたくても学校がないために勉強ができないネパールの子どものためにネパールへ学校を建設しよう」という提案を受けました。立派な校舎を大切に使うほしいという思いもあり、また、道徳の教科書に掲載されている「ネパールのビール(吉田直哉作)」等の作品に触れたこともあり、活動を始めることにしました。人吉一中での主な活動(建設資金の捻出)は

- リサイクルチーフスデー活動(毎週火曜日、空き缶・新聞・雑誌等を持って登校する)
- 夏休みと冬休みの廃品回収
- 文化祭でのPTAバザー
- 合唱部と吹奏楽部による学校コンサート

これらの活動により、平成5年度に1校を建設、12月にネパール訪問団(生徒・PTA・教職員、計35名)を編成し開校式に出席しました。

3. 本会の設立と活動

平成6年10月に、人吉一中の活動を継承し、発展させるために本会(当初は「セーブ・ザ・チルドレン人吉球磨」)を設立しました。平成8年からは、活動の地域を熊本県内全域に徐々に広げ、熊本県内全小中学校を対象に「書き損じはがき」の回収活動に取り組むことにし、平成19年で15校目となり、現在16校目の建設を検討しているところです。

4. おわりに

当初は、「セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン」、次に「国際協力機構(JICA)」の協力をいただいていたのですが、ネパールの政情不安もあり日本の団体は4年前にネパールから撤退したので、現在は「ネパール赤十字社」の協力をいただいで活動を続けています。

ネパール赤十字社には、よく協力をいただいているものの、言葉の壁や国民性の違いもあり意思疎通に不便を感じています。加えて政情不安やインフレ傾向もあり懸念材料も多く、今後更に困難になってくることが予想されますが、地道にコツコツと努力をしていきたいと思っています。

第 3 回西日本国際財団アジア Kids 大賞 受賞者の活動内容

清武館道場

(1988 年設立 代表者：小野勇治氏 会員数：33 名(平成 20 年 1 月現在)
活動地域：韓国(釜山市)・大分県豊後大野市)

清武館剣道場と正心館剣道場との相互交流

1988 年、私費により清武館剣道場を建設し、これを機会に釜山市にある正心館剣道場との相互交流が行われるようになって 20 年を迎えようとしています。

今は博多から高速船でわずか 3 時間の釜山ですが、当初は下関から一昼夜をかけてフェリーを利用することしか方法がなく、また今のようにビザなしの渡航はもちろんできないし、写真撮影などの規制も厳しいものがありました。それでもわずかな時間と経費で異文化を体験できることは、特に子供たちに大きな影響を与えるものと考えました。

事実、高速道路が非常事態には飛行場になることなど見ることによってその緊張感は伝わってきます。また言葉や交通法規がまったく異なる体験をさらに進めるためホームステイを原則に行ってきました。

これまで清武館からの訪問者は 200 名を越し、正心館からも同じような訪問者を受け入れています。とりわけ釜山市は大都会であるのに対して清川は田舎ではあるが結果的にこれがよかったと思います。それはお互いにあるものを共有できたことで、我々は活気と躍動感あふれる人々の生活を体験できる一方、大都市釜山にはない日本の原風景が残る田舎での短い時間を過ごせる癒しの空間は、お互いの充実感となって今日に至っています。

こちらからの訪問は春休みです。釜山市の正心館からの訪問は夏休みを利用しています。春の釜山は少し寒さが残ることもありますが剣道をするには一番いい季節であり、今日日本人が忘れてきている、そして子供たちに伝えたい大切な家族の関係や異文化との出会いがあります。夏の清川では吹き出る稽古の汗を清流でお互いに流し友情を確かめながら時間を忘れて交流は続いています。

さらに、1993 年より清川中学校と釜山市郊外にある長安中学校との交流実現に取り組み既に 14 年を数えています。この時の長安中学校長の言葉(一発花火じゃだめだよ)は今でも残っています。これにより行政間でも交流のきっかけとなり清川村と長安邑とは友好交流を締結するに至っています。

『冷暖自知』の道場訓を基に剣道の特性を通じながら礼節、信義を学び青少年の育成はもちろん多少不便の残る日本の田舎でも国際色に富み心豊かな世代間の交流をさらにめざしています。

第 3 回西日本国際財団アジア Kids 大賞 受賞者の活動内容

福岡市立西新小学校

(1873 年(明治 6 年)創立 校長：久門 隆 児童数 1,064 人教職員数：55 名

(平成 20 年 1 月現在)

活動地域：韓国(釜山市)・福岡市)

本校は、アジアの玄関口、福岡市の中心部に位置する 135 年の歴史を持つ学校です。平成 5 年(1993 年)に、やがて訪れる国際化時代を見据えて、国際交流の重要性に立ち、最も身近な韓国に姉妹校を求め、釜山市の南川初等学校と姉妹校締結文書を交換しました。それ以降、相互訪問を中心とした国際交流を続けて今日に至っています。交流内容は、姉妹校訪問と受け入れを年ごとに交互に行い、ホームステイによる交流、学校での歓迎会・お別れ式等の交流会、作品の交換、地域見学研修、教職員同士の意見交換等を行っています。

交流の中心となるホームステイでは、訪問児童が二泊し、韓国の家庭生活を直接に体験することで、文化の違いや言葉の違いを越えてのふれあいを実感できるようにしています。本年度は、4・5・6 学年からの希望者のうち、26 名がホームステイを行いました。訪問前に、数回の学習会を開き、韓国語の習得、必要な日常会話の仕方、訪問の心得などの準備をしました。ホームステイを経験した児童が、「言葉が通じなくてもいっしょにあそんだりできた。もう一度いきたい。」「楽しいことや困ったことがたくさんあったけど、交流する中でとても勉強になった。」と、交流前は言葉や食文化の違いなどに不安を抱いていた児童が、一緒に現地での生活をする事でコミュニケーションの大切さを身をもって知るとともに、異国文化への理解を深めることができ、隣の国韓国を身近な国として認識できたことは長く続いている国際交流が築いている大きな財産と言えます。

この南川初等学校への訪問・交流を核として、韓国を通じた異国文化の理解と自国文化の理解を深める国際理解教育を総合的な学習の時間等で発展的に推進しています。

「西日本国際財団アジア貢献賞」受賞者一覧

	受賞者・団体	活動地域	活動内容
第一回 平成 11 年度	谷口 巳三郎	タイ・熊本	タイで農業指導に尽力
	東 文子	鹿児島	28 年間にわたり留学生を支援
	朝鮮通信使縁地連絡協議会 代表 松原 一征	韓国・長崎	日韓交流に貢献
第二回 平成 12 年度	モンゴルに風力発電機を贈る会 代表 平原 洋和	モンゴル・都城市	廃品利用の風力発電機を開発し寄贈及び、 支援・交流等
	アジア女性センター 代表 松崎 百合子	福岡	アジア人女性の支援活動
	ネパール歯科医療協会 理事長 中村 修一	ネパール・北九州	ネパールでの医療活動
第三回 平成 13 年度	池間 哲郎	アジア・沖縄	アジアの貧困地域についての講演活動
	片野 明子	福岡	草の根国際交流
	大分県大山町農業協同組合 組合長 三苫 卓爾	中国・大分	農業国際交流
第四回 平成 14 年度	NPO 法人地球市民の会 会長 古賀 武夫	タイ・スリランカ・ 佐賀	幅広い民間国際交流
	中国同人館 代表 田川 日出夫	中国・鹿児島	緑化支援運動・日中友好交流
	芦北町立佐敷小学校 校長 村山 正勝	カンボジア・ 芦北(熊本)	学校建設支援運動・国際交流
第五回 平成 15 年度	池田 広志	フィリピン ミンダナオ島	現地での農業指導・農村開発・ 環境保全運動
	山岳民族奨学基金プロジェクト 代表 福山 克己	タイ・佐賀	タイ少数民族山岳民族への支援活動
	玄海人クラブ 代表 兪 華濤	韓国・佐賀・福岡	日韓草の根交流
第六回 平成 16 年度	郷土の文化と国際交流を考える 会 会長 平野 昭光	大分	23 年間にわたり 130 か国からの 留学生受入支援
	NPO 法人 宮崎国際ボランティアセンター 理事長 杉本 サクヨ	インド・宮崎	現地での養育支援事業・国内での 国際理解教育活動
	NPO 法人 シャンティ山口 代表理事 角 直彦	タイ・山口	タイ山岳少数民族への定住支援活動
第七回 平成 17 年度	カンボジア教育支援フロム佐賀 理事長 松尾 由紀子	カンボジア 佐賀	学校建設・教育支援活動
	カンボジア地雷撤去キャンペーン CMC 代表 大谷 賢二	カンボジア・福岡・ 東京・愛知・大阪	地雷廃絶と被害者救援活動
	特定非営利活動法人 ジャっど 理事長 小幡 順子	ラオス 鹿児島	現地での保健衛生教育支援
第八回 平成 18 年度	小さな国際交流の会 代表 野口 照代	福岡	20 年間にわたり日本在住外国人へ日本語 教育を通じて言葉・習慣・作法等を指導
	上野 茂	タイ・ラオス マレーシア 大分	自ら障害を持つにもかかわらず、アジア諸 国の障害者へ、車椅子製造技術を伝導し、 現地の福祉向上に寄与
	特定非営利活動法人 国際協力の会 MIS 代表 古賀 等	ミャンマー 佐賀	現地の浄化システム設置・定期的なメンテ ナンスによる医療活動支援

「西日本国際財団アジアKids大賞」 受賞者一覧

第一回 平成 17 年度	太宰府市立太宰府西小学校	韓国・中国 福岡(太宰府市)	韓国初等学校との児童相互訪問・教員同士の情報交換等国際交流活動
	宮古島市立下地中学校	台湾 沖縄(宮古島市)	台湾の中学とのホームステイ・体験授業・交流会を通しての国際交流事業、台湾大地震救済の募金活動
	甘木市立馬田小学校	カンボジア・中国 福岡(甘木市)	国際交流体験学習、国際ボランティア募金活動を通しカンボジア・中国の小学校との国際交流事業
第二回 平成 18 年度	佐賀県柔道協会 三神支部 支部長 緒方 勝一	韓国 佐賀(鳥栖市)	20年にわたっての韓国の柔道協会との国際交流事業
	対馬市立 雞知(けち)中学校 校長 小島 徳重	韓国 長崎(対馬市)	生徒会の専門活動「国際理解部」を設置、韓国新仙中学校とのホームステイ等を通じた国際交流事業